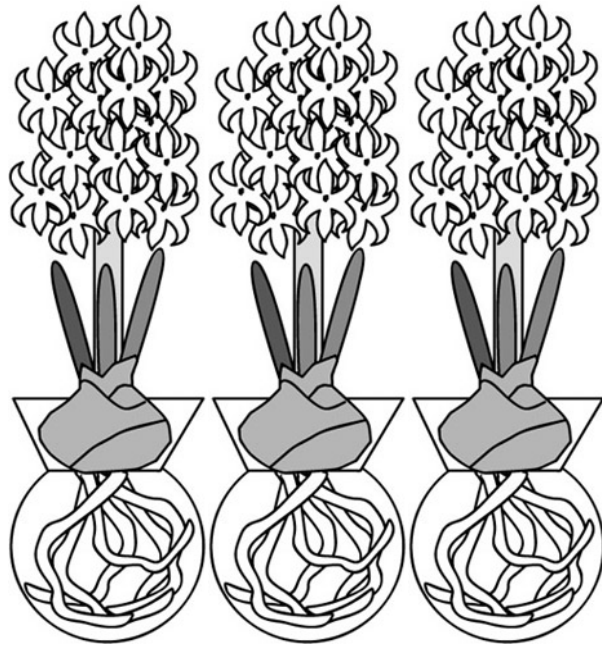


# 輝いて

令和6年度中学生人権作文集



広島法務局福山支局  
福山人権擁護委員協議会

## 「輝いて」はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための人権啓発活動の一環として、昭和五六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、これを受けて広島法務局と広島県人権擁護委員連合会は同コンテストの広島県大会を、さらに、広島法務局福山支局及び福山人権擁護委員協議会は同コンテスト福山地区大会を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生に人権問題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性及び必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けていただくことを目的としており、令和六年度で四三回目となりました。

本年度は、福山地区（福山市・府中市・神石高原町）内三二校の中学生から一、九二一編の作品が寄せられました。福山地区大会に応募のあった作品の内容を見ますと、家庭生活や地域・学校生活の中で感じた出来事を基に、「障がいのある人に関する問題」、「性的マイノリティに関する問題」、「こどもに関する問題（いじめや児童虐待など）」、「高齢者に関する問題」などをテーマにした作品が数多く見受けられました。依然として「いじめ」をテーマとした作品も多く、中学生にとって「いじめ」が深刻な悩みの一つであることがうかがえます。また、「外国人に関する問題」をテーマとした作品など、外国人が身近な存在となった現代社会を反映した作品も印象に残りました。

応募作品は、いずれも感性に富み、純粋な感覚で物事をとらえ、身近な「人権問題」について自分の考えを素直に表現したもののばかりであり、深い感銘を受けるとともに、中学生が様々な人権問題にしっかりとした考えを持って向き合っていることを、心強く感じました。

この作文集が、より多くの方々に読まれることにより、地域社会において人権尊重の輪が更に広がり、人権尊重思想の普及高揚に役立つことを強く願っています。

終わりに、本コンテストの実施に当たり、多大な御支援と御協力をいただきました福山市、府中市及び神石高原町の各教育委員会、中学校等関係者の皆様方に、そして御応募をいただきました中学生の皆さんに心から感謝を申し上げます。

令和七年一月

広島法務局福山支局  
福山人権擁護委員協議会

# 目 次

「親切の連鎖」	1	
親という存在	2	福山市立城北中学校
守るために、守ること	3	福山市立城南中学校
自分らしく	4	福山市立城東中学校
「海を渡ってこんにちは」	5	福山市立城東中学校
周くんと「暮らす」これから	7	福山市立城東中学校
全人類が輝く世の中へ	8	福山市立城東中学校
花火の音	10	福山市立城東中学校
外国人が日本に来るときの困難	11	福山市立城東中学校
みんな個性的	12	福山市立培遠中学校
痛みを知った日	13	福山市立中央中学校
接し方について	15	福山市立芦田中学校
繋がり	16	福山市立加茂中学校
私の宣誓	17	福山市立駅家中学校
「違い＝個性」を大切に	18	福山市立誠之中学校
ハチドリ勇氣をもって	19	福山市立誠之中学校
自分にしか見えないこと	20	福山市立誠之中学校
平和な世界のために私にできること	21	福山市立城西中学校
出会いに感謝	23	福山市立新市中央中学校
無意識に閉じ込めていませんか？	24	府中市立第一中学校
妹から教えられたこと	25	府中市立第一中学校
託されたいのちのバトン	26	学校法人盈進学園盈進中学校
障がい者等用駐車区画って飾りなの？	28	近畿大学附属広島中学校福山校
「人権」でつながる私たち	29	近畿大学附属広島中学校福山校

## 「親切の連鎖」

福山市立城北中学校 二年

片岡久怜愛

私はいつも通りの電車に乗っていた。その日は電車の出発時間までが長く、ぼーっとしていると一人の女性が私と同じ車両に入ってきた。そのとき私は女性のことをまじまじと見てしまった。隠せなかったのだ、驚きを。なぜならその女性は犬を連れていたからだ。私にとって、初めての出来事だった。最初は犬を連れてくる驚きだけだった頭の中で単純な疑問が浮かんできた。

「どうして犬を連れてくるのだろうか。」

その疑問と同時に私は理解した。女性のカバンには「視覚障害があります。」と書かれたバッチがついていたからだ。

つまり、女性が連れていた犬は盲導犬で、犬は女性に案内をしていたのだ。

自然と周りに立っていた人が端に寄り、犬は空いていた席に女性を案内した。女性は席につき、犬は女性の席の前で安堵したように座り、横たわった。女性は申しわけなさそうな様子だったが、周りの人は嫌な顔をしなかった。中には「可愛いくてお利口なワンちゃんですね。」と声をかける人もいた。「ありがとうございます。」女性が言った一言で見えていただけの私まで温かい気持ちになった。私だけでなく、周りの人もそう感じたようだった。

私を含め、おそらくあの場にいた人は盲導犬を連れなければ

いけない経験はしていないだろう。それでも、盲導犬を連れて女性に当たり前かのように親切にすることができた。

人に親切にすることは法律で定められているわけではないし、義務付けられているわけでもない。それでも、「誰かのために」という気持ち一つで人を支えることができることを改めて思った。

しかし、人に対して親切に接することは簡単ではないとも私は思う。なぜなら、相手に親切に接することで時間や労力、物を失うことがほとんどだからだ。友達に絆創膏をあげればなくなるし、手伝いをしたら労力と時間がなくなる。でも、このように失うと言っても大抵のものは簡単なものだったりする。だからこそ、少しの真心も必要だと私は思う。

学期の終わりに近づいていた頃、私はリュックと両手にたくさん荷物を持って帰っていた。荷物はとても重たく今にも倒れそうだった。駅のホームの階段を上り、電車に乗ると、席が一つだけ空いていた。私は心の中で喜びを感じた。だが、ホームには赤ちゃんを抱えた女性がおおり、こちらの車両に入ってくるようだった。

私は今すぐにでも座りたいと思っていた。しかし、結局席に座るのをやめ、ドア付近に立った。思っていた通り、女性は赤ちゃんを抱えて席に座った。私は疲れていたが、いいことをしたというふうに見える。そして、私は水を飲むとしたが、水を飲むにも両手が塞がっていた。水を飲むのを諦めていたら席に座っていた女性達が少し寄って

「ここに荷物置き！」

と言ってくれたのだ。私は感謝しながら荷物を置き、水を飲むことができた。そのあとすぐに遠慮して荷物を持ったが、なんだか軽くなった気がした。

このときに私は再認識した。確かに人に親切にすることで、自分はラクできないかもしれない。その上、親切に接しても気づいてもらえないかもしれない。それでも真心を持って、人に親切にすることで誰かに感謝され、また親切にしたいという気持ちが生まれる。これは自己満足かもしれないが、自己満足によって親切が繰り返されるなら、いずれは明るい社会に向かっていくと思う。さらに、自分が親切にして感謝されるように相手への感謝をすることで連鎖していき、さらに明るい社会に近づける。

親切にされるだけでなく、親切にしてもらった側は感謝の気持ちを忘れないことも大切であり、社会全体で支えていくことが明るい社会への一歩へつながると私は思う。

## 親という存在

福山市立城南中学校 三年

坂本隼大

私が生まれて二、三年して父と母が離婚した。まだ幼い頃の私は何が起ったか理解できなかつた。小学生に入る前ぐらいに私は母が育ててくれたこと、お父さんがいないことがよく理解することができた。でも僕は何も寂しくなく元気に過ごることができた。それは母の存在だった。私がやりたいことは何でもさせてくれた。母は私に精一杯の愛を注いで育ててくれた。だから父さんがいなくても平気だったと思う。でも小

学生になって参観日などに見る他の子のお父さん。私は母にお父さんが欲しいと難しいお願いをした。でも一年ぐらいして母と同じ仕事場で働いていた男性と遊ぶようになった。母はその男性があなたのお父さんでもいいかなと言ってきた。私はその男性と何度も遊んで心もうちとけていたので、この人ならお父さんでもいいなと感じた。そして現在までまるで我が子のように育ててくれていた。

私が小学校四年生ぐらいになって、児童養護施設という言葉を知った。みなさんもお存知のようにそこは家庭環境などが理由で子どもを育てることが困難になり子どもをあずける施設です。その子どもたちはどんな気持ちでどのようなことをするのかは分からない。でも私の過去との違いで気づいたことがある。それは母一人でも育ててくれること、お父さんとお母さんがいること、温かい帰る場所があること、両親の愛が感じられることが当たり前なことではなく、小さな奇跡だということに。このようにどうして児童養護施設が必要なのかもう一度考えてみたい。どうしてそんなに孤児が生まれるのか。私は最近こんなニュースがよく目に入る。それは家庭内でよく子供が亡くなるニュースだ。私はただ他人事だがかわいそうとしか思わない。ニュースの死の出来事で心から泣く事、涙を流す事はできない。しかしそれが自分の肉親なら別だ。身内が亡くなったら涙を流すだろう。他人と比較する人間は悲しいものだ。ではどうしてそんなに子どもが亡くなることが多いのか。

私は両親の影響がかなりあると思う。子どもを育てるためのお金がない。または虐待とかが理由で孤児が増えて、亡くなりましたというニュースが増えてきているのだらうと思う。こういうニュースを見て私はこうなるんだらうと産むなよと思う。子どものことを何だと思っているのと心から感じる。子どもの

人権は両親が与えるものなのにそれを奪っているのを見て悲しくなる。だから子どもたちの人権は大人達が守ってくれないと思う。そして両親が子どもが帰れる場をつくるのが子ども達にとつて一番嬉しいことだと思う。もし親の愛情を知らないまま育つたらいじめに合ったり、犯罪を犯してしまったりと子ども自身に影響を及ぼす。このように子どもたちの人権を守るためには大人達が子どもが安心して暮らせる場所を与えることです。子どもを産むことはどういうことなのかをもう一度考えてほしい。



## 「お母さん、ありがとう」

福山市立城南中学校 三年

福田 莉央

「母さんの仕事は看護師だって絶対に言っちゃいけないよ。」これは、私が小学校四年生から小学校を卒業するまで、母に何度も言われた言葉だ。

当時、世界中で新型コロナウイルスが蔓延しており、ニュースでは「新型コロナウイルスの感染者数が〇人を超えました。」「〇〇県で緊急事態宣言が発表されました。」などの情報が一番大きな見出しとして放送されていた。

母が勤務している病棟でも、多くの患者がコロナに感染し、母が直接コロナ患者対応をすることもあった。そのたび、母は

通常の勤務より、よりいっそう疲れた様子で「母さんの仕事は看護師だって絶対に言っちゃいけないよ。」と言った。初めてこの言葉を聞いたとき、私は理解できず「なんで。」と聞いた。すると母は言った。「友だちや周りの人がコロナの正しい情報を知っているとは限らないと思うんだ。もしかしたら、嘘の情報を信じているかもしれない。母親が看護師だということを知られたら仲間外れにされたり、もしかしたらいじめられるかもしれない。だから、言っちゃだめ。」このことを聞いて、私は友達に「お母さんは何の仕事してるの。」と聞かれても「わからない。」と答えるようになった。

そんな状況にある私に、ある出来事が起こった。私が通っている小学校に陽性者が出たのだ。学校は休校になり、私は当時の基準でPCR検査を受ける対象になった。そのことを聞いたとき、私は思わず泣いてしまった。「私が陽性だったら……。家族にうつたらどうしよう。重症化したらどうしよう。」このようなことで頭がいっぱいだった。検査の結果は陰性だった。私はほっとしたと同時に、陽性になった生徒が心配になった。「その子の体調は大丈夫だろうか。その子は批判を受けていないだろうか。その子は苦しい思いをしていないだろうか。その子は今後学校に来れるだろうか。」このようなことを考えているうちに、私はあることに気付いた。それは、私は知らないうちに批判する側になっていった可能性があるということだ。私は感染し家族にうつることや重症化することを恐れて泣いた。でも、それを陽性になった生徒が見たらどう思うだろうか。その生徒は私が想像できないくらい苦しむかもしれない。私は、母の職業的に批判する側にならないだろうと考えていた。しかし、私が自分と大切な人を守ろうとする心、自分の知らないものを恐れる心。その心が他者には批判として捉えられるのかもしれない。

これらの経験から、私は新しいものや自分の知らないものを経験するときに、自分の都合のいいように決めつけないで正しい理解をする必要があると思った。なぜなら、それは多くの人を苦しめる情報のもとになる可能性があるからだ。正しい理解が出来なかったから、コロナに関する偽りの情報が発生した。そして、その偽りの情報を信じ込み、その情報に従って行動する。その後、その情報を拡散する。自分の信じた情報が嘘というだけで自分の理解が間違えていただけで、関係のない人が傷つけられた。これらのことを、コロナというものから学んだ人は私以外にも多くいると思う。

現在、SNSなどが発達し、私たちの周りには多くの情報であふれている。でも、その情報が全て正しいという訳では無い。情報を伝えやすくなった今だから、私たちは情報リテラシーや情報モラルを守ることが大切だと思う。これは多くの人を守るために、守ること。偽りの情報で苦しむ人が少しでも減りますように。

## 自分らしく

福山市立城東中学校 三年

橘 高 蒼 生

私の性別は女性です。でも私は、「女の子なんだから」という言葉が大嫌いです。私は髪が短くて、服装も男性みたいだと思います。別にトランスジェンダーや性同一性障害というわけでもありません。ただ、なりたい自分、カッコいい自分になりた

くてそうしているだけです。

でも、「女性はこう」「男性はこう」という考えの人は世の中にたくさんいます。でもなぜ女性は髪が長いのが普通なのか、女性らしい服装をしないといけないのか、男性は化粧をしないのが普通なのか、髪が短いのが普通なのか疑問に思います。そもそも、女性らしい服装とは何なのか分かりません。「女性はこう」「男性はこう」というのは決まっています。生きている中で、その人が勝手に作り上げた固定概念であり、偏見です。一つも正しくないものを、普通のこととして、他人におしつけているだけだと思います。

最近トランスジェンダーや性同一障害の人は増えていると思います。それに伴ってジェンダレスへの取り組みや活動も多くなっていると思います。でもまだまだ生きづらいです。私は生活していく中で、家の外でトイレに行ったり、プールや温泉の更衣室に行ったりするとめっちゃめっちゃ見られます。男性だと思われているんだと思います。男性だと思われていることは全然構いませんが、見られるのは嫌です。トランスジェンダーや性同一障害の人は私よりつらいと思うし、嫌だと思いません。見られるのはいいですが、コソコソと聞こえない声で何か言われたりするのは不快な気持ちになります。男性が女性のように化粧して歩いていたら見てしまうかもしれません、見たときに「ヤバッ」とか「キモッ」とか小声で言ったりする人を見たことがあります。そう言う人がいるから、まだまだ生きづらいです。

それ以外にも、男性の方が優位な職場や男性または女性の方が多い職場は働きづらい人もいます。自分の好きな仕事や、やりたい仕事をやっているのに、性別上の問題で働きづらいのもしんどいと思います。

私は男性に間違われることがよくあります。私は何とも思

ませんが、母はあまりよく思っていない。それは何となくですが、感じていきます。母は私を産んでくれた人なので、私の髪が短くなつていくのも、服装が男性みたいなのもあまり良く思っていないと思うし、女の子らしくいてほしいと思つています。それでも、体育祭で団長をしたときに母が、「誰よりもかっこよかった。」と言つてくれたときは、本当にうれしかったです。母は女の子らしくいてほしいと思つているかもしれませんが、私が生きたいように生きていくことが一番うれしいと思うので、ありのままの自分で生きようと思つています。

ありのままの自分で生きていくには、その人の近くに、一人でも理解してくれる人が必要です。例えば、家族や友達に同性愛者だと打ち明けるのは、とても不安で怖いと思つています。なぜなら、理解してもらえなかつたり、変な目で見られるようになつたり、自分から離れていつたりするのが怖いからです。だからこそ、そばに一人でも理解してくれる人がいれば、すぐ救われると思つています。ジェンダーレスを実現するには「女性はどう」「男性はこう」という考えをなくさなければいけません。それはとても難しいことだし、実現するにはとても長い時間が必要で、それでも性別で悩んでいる人のそばに少しでも理解してくれる人が増えていつてほしいと思つています。

正直私は、この世の中は生きづらいです。私は、自分の人生なので周りの人に何を言われてもあまり気にしません。でもなぜ、自分らしく生きていく人がつらい思いをしたり、周りの目を気にして傷ついたりして生きていけないのか分かんないです。その人がどんな性自認、性表現をしていようが自由です。

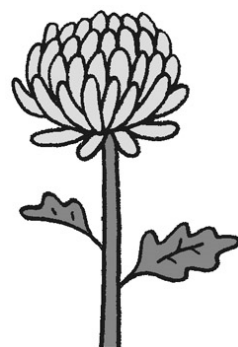
性別で悩んでいる人の気持ちは、悩んでない人には分かんないし、どんな気持ちなのか、馬鹿にされてどれだけ傷つくのか

も分かんない。人がどんな性別で、どういう風に生きていくかは、一人一人の自由です。なりたいたい自分・本当の自分を貫いて生きていく人はとてもかっこいいです。どんな性別で産まれてこようが、勝手に作られた意味の分かんない、女性・男性の「定義」に沿って生きていかななくてもいい。世界中の全員が、自分らしく、堂々と生きていける世の中に少しづつでもなつていけばいいなと思つています。

## 「海を渡つていんどちは」

福山市立城東中学校 三年

坂井 香奈穂



私には、叔父がいる。叔父は、仕事で海外へ行く事が多く、英語や韓国語を話すことができる。その叔父がかつて海外であつた出来事について話をしてくれた。

叔父は若い時に、新たな人生の挑戦のためワーキングホリデーを利用してカナダに行った。誰も頼ることができないゼロからの出発で英語もろくに話せないまま荷物一つで乗り込んだのである。新たな地でまず始めにすることは、家を借りることだ。しかし、部屋を借りたくてもなかなか承諾してもらえなかつた。英語力の問題だけではなく、アジア人であることが問題だつたのだ。マナーなどの問題で、アジア人にいいイメージを持たな



いオーナーが貸すことを渋ったのだそう。日本人の印象は悪くないが、アジア人としてひとくりにされてしまい、偏見の目で見られたとのことだった。ひどい時は、いきなり「ジャップ」と言われ、差別的な扱いをされたこともあった。また、仕事もなかなか採用されなかった。結局日本人が経営する会社に就職することができたが、表立っては言わないがアジア人を採用することに難色を示す会社も多いという。国としては、外国人差別の問題を重く捉えており、出身地や性別などの差別は禁止されている。履歴書にそれらを記載せず、面接で本人の人柄や能力のみで判断することになっている。しかし、実際には差別が存在すると叔父は感じている。

しばらくして、叔父は韓国に住むことになった。そこでの外国人差別は、歴史的な背景によるものだった。先の戦争により反日感情を持った人が一部いる。それ故に日本人であるだけで激しく敵対視される。日本の終戦の日は、韓国では日本が戦争に負けた祝福の日で、今もなお喜び合う人もいる。もちろんカナダも韓国もいい国だし、偏見や差別をすべての人が持っているわけではない。多くの人は親切でそこで暮らしたことを後悔はしていないと叔父は言った。

現在、叔父は日本で働いているが、今はイギリスに出国している。イギリスでは、外国人差別と感ずることは今のところないようだ。国として差別ができないような対策がとられているという。カナダと同じく、履歴書には、出身地や性別などの記載はしないことになっており、個としての能力で判断することが法律上決まっているようだ。しかし最近、イギリス人の子供が複数殺されるという残虐な事件があり、その犯人がイスラム国の人ではないかというデマが流れ、国民に警戒するよう通達が出たという。イギリスでは、宗教の違いを認めていないわけ

ではない。むしろお互いの違いを尊重している風潮があるにもかかわらず、一部ではこんな残虐なことをするのはイスラム国の人に違いないと決めつけているのである。これは、宗教に対する差別である。

叔父は、海外生活の中で日本より欧米の方が外国人差別を禁止する対策が進んでいるが、結局歴史的背景や宗教、個人的な偏見によって見えない部分ではまだまだ差別があるのが現状だと言う。

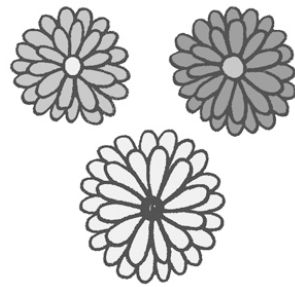
それでは、日本ではどうだろうか。私は、親戚に外国人が多いこともあり、外国人差別や偏見はないと思っていた。しかし、会話の中で「ハーフ」という言葉をよく使っている。叔父から、この「ハーフ」という言葉を海外で使うととても嫌がられると教わった。「ハーフ」とは半分という意味で、それぞれ違う国の出身の親を持つ子供のことを指す。この半分という部分が差別にあたりとされている。人として半分であり未完成というような意味にとられてしまうからだ。最近では、「ミックス」と言うらしい。それもあまり好ましくないが、「ハーフ」よりはましだという。「外人」という言葉もよくない。「人の外」つまり人以外というような、人と認めないとの印象を持たれてしまうからだ。このように私も何気なく使っている言葉の中に差別と捉えられてしまう表現をしていることに気付いた。

日本は閉鎖的な島国である。外国人に対して偏見は強いと思う。日本は、もっと法律的に差別ができないしくみを作った方がいい。例えば、欧米での履歴書の内容や面接での出身地や性別での聞き取りを禁止することは参考にすればいいと思う。規則を持って意識改革をしていくのだ。

人はみんな違うのが当たり前で、出身や肌の色、性別で勝手に想像し決めつけるのは間違いである。決めつけが偏見となり、

差別している自覚がないまま相手を遠ざけてしまう。相手を知ることや理解することで自分の身近になれば偏見は減っていき差別をしなくなる。

今回、叔父に海外での話を聞いて、私は日本で暮らしている外国人に「こんにちは。」と自分から挨拶を試してみようと思った。まずは相手を受け入れること。そして人のパーソナリティを認められる自分でありたいと思う。



## 周くんと「暮らさ」いっしょに

福山市立城東中学校 三年

町田真駆

私には、障害者の叔父がいます。父の実家の兵庫で祖父母、父の妹の叔母と四人で暮らしています。私の父の兄なので「周くん」と呼ばれています。周くんは「ダウン症」という病気で生まれつき言葉が話せないで、身振り手振りなどのジェスチャーで自分の気持ちを表現します。私にはこのジェスチャーの意味がいまいち分かりませんが、祖父母や叔母そして父は理解できるそうです。「コーヒーが飲みたい」「納豆とヨーグルトが食べたい」「サザンオールスターズが聴きたい」「トイレに行きたい」これらの表現を周くんは独自のジェスチャーを使って回りに伝えていきます。(指をさし「アダ」とつぶやきます)

私が生まれた時から、家族で長期連休の際は必ず実家に帰省しており、周くんと接する事は私にとって特別なことでは全くありませんでした。特に父は帰省する度に、「周くん、帰ったよ」と全身全霊で喜びを表現しながら抱きついており、そんな光景も今年四十歳と四十二歳になった二人にとっては小さい頃からの当たり前で、分かりやすい言葉で言えば兄弟の絆だろうと思います。また、十四歳になった今だから分かりますが、父は私と妹が小さい時から「真駆、咲菜おいで。周くんと手を繋いでごらん」と沢山言っていました。そのおかげもあり、兵庫に帰った際に祖父母家族と私たち家族で遠出をする時は私や妹が周くんと手を繋いで歩くのが当たり前になっていました。周くんは家族としか手を繋ぎたがらないので、小さい頃から接している私たちを周くんは家族と認識していると思うと嬉しかったです。

ただ年齢を重ねるにつれ、周くんは今までと違う行動が目立つようになりました。主に突然自分のほほやこめかみ辺りを思いつきり叩いたり、外出中に大勢の人の前でパニックになり突然暴れ出したりといった行動です。お医者さんの話では自律神経の乱れによるものらしく、発作的に起きる為、周りの家族がなだめてあげるなど対処が必要らしいです。自分が小さい時から周くんを見ていたから分かりますが、五年程前からこの症状が始め、特に外出中のパニック時は祖父母が力づくで手を掴み、何とかその場から立ち去っていったようです。その事は祖父母から話だけで聞いていましたが、遂に私自身もその光景を目の当たりにする時がありました。

中学二年生の夏休み、皆で任天堂大阪へ買い物に行った時の事でした。どうしても大阪駅の中を通らないといけなかった為、皆で歩いていました。しかし何かを察知していた祖母と叔母は、

まるで宇宙人を拘束するかのようにはグツと周くんの両腕にしつかりと腕を通して歩いていましたが、突然その時はやってきました。

「やだー！やだー！」

何百人という人が行き交う駅構内で、周くんが突然暴れ出したのです。その力は非常に強く、祖母は飛ばされ叔母は一人で周くんを引っ張って止めていました。直ぐに祖父と父が加勢しましたが、そこは人が多い大阪駅、すれ違うたびに子供ながらに沢山の冷たい視線を感じました。そして同時に凄くかわいそうなものを見るような視線も。

何とか人気の少ない所に移動した時、私は無意識に周くんの手を繋いでいました。上手くは表現できませんが、あの大勢の視線から周くんを守りたいと心から思ったのです。そして家族を見ました。祖父母は「周くんごめんね。人が多くてビックリしたね」叔母も「もう少し人通りが少ない所を調べとくべきだったね」と何事もなかったように自然に接しており、父は相変わらず「周くくん」と落ち着かすように抱きしめていました。周くんは先ほどのパニックが嘘みたいになり落ちて笑っていました。

そのような周くんの近況や、何より祖父母が七十歳前後と高齢になってきた事から、前回帰省した際、父母は自分たちの思いを伝えました。「福山で暮らしてほしい」と。祖父母にとって長く暮らした兵庫県を離れる事を決断するのは難しかったと思います。でも自分たちの事もそうですが、周くんのこれからの人生を考えた時、あらゆるケアを父母に渡して行く事が必然だという考えに至ったそうです。そして私にとっても、祖父や周くんが福山に来てくれる事をただ喜ぶだけでなく、しっか

りと守っていけるような人間に成長したいと思っています。この前、祖父母と周くんが我が家に遊びに来た際、周くんが私の前で冷蔵庫を指さし、「アダッ」とつぶやきました。コーヒーが飲みたいんだよね。大丈夫。分かっているよ。

## 全人類が輝く世の中へ

福山市立城東中学校 三年

宮下真緒

障害のある人は、どんな物事を行うときでも足を引っ張ってばかりで役に立たない、あるいは効率が悪いととらえる人がいる。

私は駅前で友達と歩いていたとき、私が前方から来る人に気づかず友達が衝突を防いでくれたおかげでお互い負傷せず済んだ。衝突しそうな人になった人は目が見えない障がい者だった。その人は道に迷っていて、私と友達は遊ぶのを中断し一緒に付き添って道案内をした。そして無事に目的地のパン屋さんに辿り着くことができた。自分の時間を使ってまで助けるのは時間もつたいないと思う人もいるだろう。けれど私は、その障がい者を助けることができている時間がムダになったとは一ミリも思わず達成感が湧き清々しい気持ちになった。その後、時間が経つてから当然のことをしたのはないかとも思った。

また、三年前の東京パラリンピックをテレビで見っていたとき

に、障がいを持つ選手とその人をサポートして並走する人の姿が目にとまった。私から見ると、障がい者だから支えるというのではなく、一人の普通のアスリートとして見てサポートしているなど思った。そして、その姿は自分が輝ける舞台で堂々と実力を発揮し、まぶしいくらいにその輝きを観客の人にはなっているように私の目には写った。これは、どんな人でも輝ける場所が必ずあるんだというメッセージにも受け取ることができた。

それから、昨年の夏休みに障がい者が大半を占めるチョークの会社の実際にあつたことをドラマにしたものを見た。特に知的障がい者の方たちが中心で、その人たちは繰り返し返しの単純作業を得意とするため、この特徴を活かした製造工程を行うといったあらずじのものだ。学校の黒板からホワイトボードに移り変わっていき、チョークの需要が減少して、徐々に経営困難になつていった。そんな時、障がいを持つ社員が窓にクレヨンで絵を描いていた。それが「水でふいたら消えるクレヨン」を開発するきっかけとなつた。社長とクレヨンで絵を描いていた社員を中心に開発を行うことになつた。社長は安全で水で消えるクレヨンの成分を調べ様々な材料から作り、それを実は色彩感覚が優れていた社員とお互いできることを発揮しきつた。だからこそ、水でふくと消えかつ、発色もよい最強のクレヨンを誕生させることができたのである。私は、このドラマを見た後、障がいを持つ人は普通の人ができることが一部できないこともあるため、マイナスなイメージでもあり存在だと思ふ人は世界中に多くいるけれど、こんな身近に協同することで得られる成果があるのだと身に染みた。そして、どんな特徴をもつて生きていてもその人の個性や考えは周囲の人に認めてもらえることは人生の中で必ずあるということを心の奥底から思い感銘を受け

た。

このような三つの出来事から考えたことがある。それは、どんな人間でも助け合わなければ生きていくことはできないということだ。なぜなら、例えばどんなに仕事ができても家事ができない人は家政婦さんやヘルパーさんに頼らざるを得ない。それから、スマホの調子が悪くなつたら、電気屋か携帯ショップの人に相談し、直してもらおうようにすること。火事のとときや誰かの命が危ないときに救急に通報し助けてもらおうときにかかるお金は、国民から集めた税金から出ている。税金は、必ず国民全員が払わなければならないものだから全員が助け合つて生きているということが分かる。だから、障がいを持つている人も例を挙げた人たちと同等の立場になると考えた。人間は生きていく限り誰かと接して助けてもらわなければ生きていくことができないのだ。なのに、この世の中の人々は何かができなかつたり普通の人とは違うことがあるというような障がい者を枠の外に出していたり、差別している。この現状をこれから少しずつ減らしていくためにも、障がいの有無に関係なく全ての人がそれぞれにあつた舞台や場所でも能力を発揮していくことで、全人類が平等に輝ける世の中を実現させることができる。これを実現させたとき、人権は本当の意味で平等に与えられたものだと私は考える。そのために、まずは障がいを持っていてもできるといふことを世界に発信して拡散し、それから何かアクションを起こすことで世の中の人々の考え方を変えるきっかけを作ることが大切だと私の中で確信を持つている。



## 花火の音

福山市立城東中学校 三年

山口咲希

「ひゆるるるゝどん」と夜空に打ち上がる花火。それは私達にとつて娯楽であり、真夏の楽しみの一つでもあります。しかし、福山空襲のあの日からそんな花火の音がとても恐怖だと私の曾祖母は言っていました。曾祖母によると、花火の音は爆弾が落ちる音ととてもよく似ており、聞くだけであの日を思い出してしまふそうでした。そんな娯楽にも、恐怖を植えつけた戦争について知るべき義務があると、初めて思ったのは小学四年生の時でした。

小学四年生のとき社会科見学で原爆ドームと資料館を訪れました。その時は原爆が落とされたことだけは知っていたけど、詳しくどんなことがあったのかは知りませんでした。それに、そこまで興味もなく昔の出来事だと認識していました。いざ行って、話を聞いてみると、その壮絶さや当時の人達の辛さなどがリアルに伝わってきて、これは本当にあった出来事なのかと信じることができませんでした。その中でも特に心に残っているのは、「水をくれ。」「助けてくれ。」と言って逃げ惑う人々の中でそんな人を無視して逃げることの辛さを語った体験談です。その中には知り合いもいたと言います。その体験談とともに展示された絵もとてもリアルで見ると気分が悪くなるほどでした。そこに描かれていたのは、逃げる人々が皮ふがはがれるなどのけがを負い、その脇道には丸焦げになった死体が転がっている、

そんな情景でした。私は、信じられない気持ちで食い入るようにその展示を見つめました。その時、私は自分事に置きかえて想像してみました。大切な家族や友人を失う辛さやそれを目の前で見ると残酷さは、想像すればするほど胸が引きちぎれそうでした。そして、この日からあの日広島であった出来事をもっと知りたいと思い始め、インターネットで調べたり、本を読んだりするようになりました。

そんなある日、私は「はだしのゲン」と出会いました。夏休みに図書館で見つけたのです。戦争中の過酷さや残酷さなどがものすごく伝わってくる内容で引き込まれるように読みました。主人公も私達と同じくらいの年代なので共感できる部分が多く、より感情移入をしてしまいました。漫画なので読みやすいし、その当時の出来事がリアルにそのまま書いてあって人生で一度は読んでほしい作品です。その中でも特に印象的だった言葉があります。それは、「何度踏まれても芽を出す麦になれ。」です。この言葉は主人公のゲンの父が言った言葉です。どんなに辛い環境だったとしても、めげずに前を向いて頑張っていれば、いつのまにか強く、大きく成長しているという意味が込められていると私は感じました。これは、今の私にもとても響く言葉です。私は、部活動で三年間テニスをしていました。うまくいかない時期でも、あきらめずに今できることを精一杯やっていたら、その積み重ねが自分を大きく成長させてくれたということを引退した今、強く感じています。このような、さまざまな学びをくれる「はだしのゲン」をみなさんにも読んでほしいです。

戦争が壊したのは、建物や人の命だけでなく、みんなに与えられるべき当たり前の日常です。私の曾祖母が花火を見られなくなったように、戦争は肉体的な被害だけでなく、日常にもた

くさんの障害を残しました。戦争が植え付けた恐怖は一生消えることなく残り続けるのです。戦争は起きてしまっただけからではもう遅いのです。

そして、私は家族と平和に暮らせるのは当たり前ではないことにも気がつきました。だから、家族や大切な人が目の前にいるうちにたくさんの感謝を言葉で伝えて、今のこの日常にも精一杯の感謝をして、もう二度とこんな悲劇が起きないように、この変わらない日々が永遠に続くことを願っています。



## 外国人が日本に来るときにの困難

福山市立城東中学校 三年

### ファムズオン

多様性に富んだ文化と魅力的なビジネスチャンスを持つ日本は、多くの外国人をひきつけて住み、働く目的地です。ただし、利点の他に、特定の困難にも直面しています。外国人が日本で生活する際によく遭遇する問題がたくさんあります。

まず一つ目は、コミュニケーションの難しさです。日本語には多くのニュアンスと複雑な文法があり、外国人にとって、特に仕事や社会的関係において困難を引き起こしています。私は小学校3年生から親の仕事の関係で日本に来ていて、日本で勉

強することになりました。日本に来るときは日本語が全くわからなかったです。特に一番難しいと思ったのは、漢字です。漢字は読み方や漢字の種類がたくさんあって漢字を覚えることが難しかったです。

二つ目は、文化に適應することです。例えば、各国の文化が違っていて、ベトナムでは旧正月を祝いますが、日本では陽正月を祝います。

三つ目は、慣習です。慣習、行動、生活概念の違いは、日常生活において誤解や不便を引き起こす可能性があります。

四つ目は、資格と経験です。多くの日本企業は資格や職歴にかなり高い要件を設けているため、学歴を持たない外国人が仕事に応募するのは非常に困難です。

五つ目は、高額な交通費と生活費です。日本の大都市、特に中心部の生活費は非常に高くて、公共交通機関はとても便利ですが、交通費は決して安くありません。

六つ目は、行政手続きと書類の要件です。ビザや労働許可証の申請、一時滞在登録などの手続きは非常に複雑で時間がかかることが多いです。多くの書類や行政手続きが必要になるため、外国人にとっては多くの困難を引き起こす可能性があります。

私は日本の学校に行く前はひらがなやカタカナしかわからなくて、漢字や言葉の使い方はわからなくて、全く喋れなくて友達もいなかったから、授業の中で困っていることがあっても友達や先生に聞くことができませんでした。勉強の中で数学や英語はだいたいできるけど、日本語の必要な教科はできなかったです。まだわからない言葉がでてきて、みんなに追いつくことが難しかったです。特に社会で日本の歴史を勉強することが難しかったです。たくさんの言葉や名前が出てきて、内容があまりわからなかったです。



日本に来て私はたくさんの方が変わりました。ベトナムにいたとき、たくさん喋れたけど、日本に來ると、日本語が分からないから、みんなと仲良く喋ることが難しく、どんどん喋りたくなくなりました。親とも話せなくなり、ほとんど毎日親とけんかすることになりました。学校に來ていじめられることがたくさんあって、学校に行きたくないときもありました。

中学校に入学して、新しいことがたくさんあって、小学校と一緒に勉強した友達と別れて、新しい友達を作らないと思いました。

私は人の名前を覚えることが苦手だから、一学期中はクラスの名前をまったく覚えられなかったです。中一はあまり喋っていかなかったけど、中二になったときからはたくさん喋れて、コミュニケーションができるようになって新しい友達がたくさん作れてうれしいなと思っていました。

私はバレー部に入部しました。中二になって入部した一年生の子たちを教えることになって、私は日本語がわからないから人に教えるのが難しかったです。一年生に「から教えるときは言葉が全く出て来なくて、教え方もすごくへただったけど、部活が終わったときに、私が教えた後輩が「ありがとうございまして。」と言ってくれて、すごくうれしかったです。

中三になり受験生になって、もっとたくさん勉強しないといけないことになって、諦めたいときもたくさんあったけど、友達が私に「ファムちゃんならできる」と言ってくれて、また勇気が出てきて、自分は外国人だけど、諦めずこれからがんばっていつて高校に行けるようにがんばりたいと思いました。

## みんな個性的

福山市立培遠中学校 三年

横山 優愛

「キンコーンカーンコーン」四時間目が終了しチャイムが鳴る。すぐに給食準備がはじまる。私はこの時間が大嫌いだ。『今日の給食何?』と楽しそうに会話する友達。私は遠くからそれを眺めた。何の給食であろうと私には関係ないのだ。

私は小学二年生の頃から外食ができなくなった。家族との外食でも食べ物喉を通らないし、家で食べるにしても一緒に暮らしている父と母以外とは満足に食事ができなかった。

私の母は、食べることが大好きな人だ。外食をした際には、「どうして食べられないの?」と責められた。自分でも分からない。怖い。逃げたい。しかし、そんな私の思いは届くはずもなかった。

そして、私は小学四年生へと進級した。新しいクラスに胸を弾ませていた私に、また恐怖の時間がやってきた。給食の時間だ。しかも、その日は新学期初日ということもあり、みんなを机を円にして食べると先生が言った。私はそれを聞きすぐに鼓動が速くなったのを感じた。給食終了の合図が出る。私は、米粒二つ分くらいしか食べることができなかった。みんながお皿を一斉に片付けだす。食べきれない人が目立つ。私はついにひとりぼっちになってしまった。先生が「どうしたの?体調でも悪い?」と、優しい声で聞いてくれた。私は首を横に振った。私はそれだけで涙が出てきた。泣いても何も変わらないと

分かっているのになぜか涙が溢れてきた。先生に「泣くことじやないでしょ。」と言われた。その後は、量が多かったというところで話が落ち着いた。今日は残しても良いと言われた。

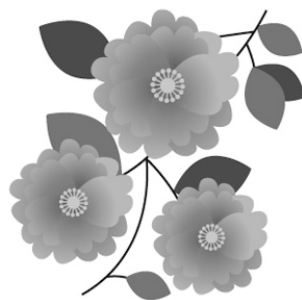
その日から毎日量を減らし続けた。給食が終わる度に一口分も減っていない私に「まだ多いのね。もっと減らさないとね。」と先生は言った。これまでずっとごまかし続けてきた私はいよいよ逃げられなくなったなと思った。最終的には、スプーン一杯分くらいの量になった。給食中の私はそれを食べるだけで精一杯なのだ。でも給食後にはお腹がすく。だって、みんなと同じ人間だから。午後の授業は必死にお腹が鳴るのを我慢した。そうするしか方法がなかったのだ。食べきれないことも多々あった。確か、六時間目くらいまで残っていたり職員室で食べたりに私はずごく救われた。

スマホを見ていたあるとき、あるサイトが目にとまった。そこに書いてあった言葉は「会食恐怖症」。説明には、「社交場で食事をするときに強い不安や恐怖を感じる」と書かれていた。それを見て「私と一緒だ。」と思った。少し迷ったが、私は母に「会食恐怖症だったと思う。」と打ち明けた。母は真剣に向き合ってくれなかった。私はショックだった。「辛かったよね。気付けなくてごめんね。」きつとそんな言葉を待っていた。

私は中学二年生になった。夏休みに保育園へボランティアをしに行った。お昼の時間は園児とともに同じものを食べさせてもらった。自分で量を調整するなどして、私は給食時間を乗り切った。量が少ないことに対しては、本当はそんなことないのに朝食の食べ過ぎとごまかした。園児の中にも、食べるのがゆっくりな子がいた。私は、その子を見て勝手に食事が苦にならないと良いなと思った。

私は、会食恐怖症のせいで色々なことをあきらめた過去がある。だから、自分にできる形で乗り越えていきたいと強く思っていた。

今、私は中学三年生。体調や状況によるけど、外食できるようになった。最近、はじめて外でラーメンを一杯食べ切ることができた。みんなにとっては普通のことかもしれないけれど、私にとっては普通ではない。人それぞれ独自の考え、スタイルがある。毎日湯舟に浸かる人、男女の友情が成立しないと考える人、目覚めの一杯は白湯の人。「十人十色」のように人々はみんな違うし、だからこそ人は美しいんだと思う。みんながみんなを自分の物差しで測っている。奇抜な人が「個性的」なのではなく、誰しもが「個性的」だとは思っている。私達は、不明瞭な「普通」を求めてはいけない。みんなの個性が輝く社会になってほしいと思う。



## 痛みを知った日

福山市立中央中学校 一年

福田 怜華

私は小学二年生の時にジャングルジムの一番上から落ちてしまい、二週間程、松葉杖生活を送ったことがあります。その二週間はとても苦痛でした。朝、一人で起き上がれないし、階段



を上り下りする時も、誰かがついていないとできないしと、いつもだったら数秒でできることが数分かかるようになりました。友達にも親にも、色んな人に迷惑をかけました。私はとても悔しかったです。いつもだったら一人でできるのに、いつもだったら今頃外で遊んでいるのに。そんな「いつもだったら。」この言葉がずっと私の頭の中になりました。きつと足よりも心の方が痛かったと思います。自分が情けなさ過ぎて、毎晩一人で泣いていました。

そんなある日、家族みんなで買い物に行くことになりました。今の私だったら家で留守番ですが、小学二年生、あまり力もなし、なにより松葉杖だったので、親も危険と思ったのでしよう。私も一緒に買い物に行くことになりました。その時私は、とてもワクワクしていました。久しぶりにみんなで購入物だったからです。私は早く着かないかなとばかりずっと思っていた。でも、現実はそのなにごくなくなかった。

デパートに着いてすぐのことだった。いつものように親に手伝ってもらいながらデパートの中を歩いていると、店員さんが、「車椅子があるので、良ければ車椅子使いませんか。」と車椅子を勧めてきた。いつも松葉杖だから慣れていたとはいえ、さすがに疲れたので、車椅子を使うことにした。そこで私は痛みを知った。車椅子になったことで、周りが見渡しやすかった。だけれどその分、人の目ももちろん入ってくる訳で、すれ違う人みんなが私を見るんだ。中には指を差してくる人もいた。そりゃそうだろう。車椅子で買い物に来ている人なんて滅多にいないんだから。とても恥ずかしかつた。顔が赤くなっていくのが自分でもわかるくらいに。

そんな中、ある一人の女性と目が合った。その人の目は、変な物を見たかのような目でした。きつと心の中で「なんだ、あ

の子は。」と思っているのでしょうか。その時私は気付かされました。私もあの目をしたことがある、と。町中で、障害者の人とすれ違うとき、「なんだ、あの人は。」と思ってしまう。私は心の中で思ったことが顔に出やすいタイプなので、きつと顔に出ていると思います。時々、目が合うことだってあります。目が合った人達は、私と同じで恥ずかしかつたと思います。私は恥ずかし過ぎて下を向いてしまいました。そんな私の姿を見て、親は察してくれたのか、カゴにある物だけ買って帰ることになりました。帰りの車の中で、私は泣いてしまいました。

家に帰ってから親が私に言ってくれました。「恥ずかしかつたよね。ごめんね。でも、何も恥ずかしがることはなかったと思うよ。」と。私は「？」が頭に浮かび「どうして？」と聞きました。そうしたら「だって車椅子も松葉杖も怜華の足の代わりじゃん。この二つがなかったら怜華は今立ってないんだよ。」と言いました。私は大事なことに気付きました。今まで私が変わる目で見ていたのは、その人の体の一部をバカにしていたんだと気付きました。

自分にとってはどうでもいいもの、使うことのないものは、誰かにとつてはとても大事なものです。それこそ、体の一部だったりします。そんな大事な物をバカにすることは許されません。私もバカにしていた人間の一人でした。でも、今は違います。松葉杖や車椅子、そして親が教えてくれました。体の一部が違ったり、物事の感じ方が人と違ったりしても別に良いのです。悪い事では決していないから。一人一人、自分だけの魅力をもっている。それが普通なのだから。その違う部分を認め合うことで、もっと世界は平和になるはずですよ。

私のこの怪我がなかったら、車椅子に座っていなかったら、親の言葉がなかったら、私は大事なことに気付いていないでしょう。

## 接し方について

福山市立芦田中学校 一年

坂本 堇

私は生まれつき右手が人よりも小さいです。私はあまり覚えていないんですけど、一歳の頃に手術をして少し手が大きくなったそうです。それでも私の右手は私の左手の掌ほどしかありません。ですが幸い生活への大きな支障はありません。習字の毛筆の時間でも大筆をもって字を書けますし、パソコンの入力も両手で打つことができますし、左利きなので食事にも困りません。ですが全く支障がないわけではなく、体力測定の際に握力計がうまく握れなかったり、ボールをうまく投げられなかったり、大きさや形によっては物を拾えなかったりすることもあります。でも私の周りにいてくれる人達はみんな優しいのです。

小学校の頃は最初みんな好奇心から「なんで手、小さいの？」と聞いてきました。でも理由が分かるとそれ以上のことを言わず、聞かず、今までと同じように接してくれました。体育の握力測定ときは握るところの調節を一緒にしてくれたり物を拾ってくれたり、細かな気遣いを沢山してくれました。それに「手が小さいから」や「その手じゃできないでしょ？」などと言わず、当たり前のことをしていてくれるかのように手伝ってくれて本当に嬉しかったです。右手のせいではないことがあるからと何でもかんでも特別に見るのではなく、手伝った方がいいなと思った時に手伝ってくれる。これは私にとってとても嬉しいことでした。でも、六年生になった時、私の手を面白がってからかってくる四年生の子がいました。私はその子の言葉を少し気にしていました。でも友達の前だったので少し強がって平気なふ

りをしていました。そしたら私の友達が自分のことのように凄く怒ってくれてびっくりしたのと嬉しい気持ちになりました。いつも右手の話はしないし、話題にも出てこないのが友達は私の右手を気にしていないと思っていたけど、ちゃんと見てくれて、考えてくれていたんだと嬉しく思いました。それから中学校に行くとき多くの友達と中学校が離れてしまいました。私は少し不安でした。というのも私は今まで右手のことを全く気にしていませんでした。それは今までの周りの人がとてもいい人で、理由を聞いて手伝ってくれて、右手で困ったことがあまりなかったからです。ですが中学校にはいろんな人がいます。私の手を面白がった四年生の子のような人がたくさんいるかもしれない。今までのように優しい人が助けてくれる人はいないかもしれない。でもその不安はすぐに消し飛びました。入学式の後、通学カバンに名前が書かれたクリップを付けるときに私が付けられなくて困っていると、話したことのない隣の席の子が「大丈夫？ 付けようか？」と言ってくれました。その子だけじゃなくてみんながとても優しくかったです。体力測定ときも私の手を見て何も聞かず察してくれて小さく調節してくれました。その行動にすごいと思いつても驚きました。嬉しかったです。入学してから今までこんな感じで何度も助けてもらいました。戸惑って、どうしようとなっている人もいました。でもその人なりに考えて行動してくれて手伝ってくれて嬉しかったです。部活の先生にも「何か困ったときには遠慮なく言って。僕の娘が車椅子生活をしているから相談してくれました。芦田中学校の人達は本当にみんないい人です。気遣いしてくれているんですけど、基本、みんなと同じように接してくれ、



私も変に気を遣わなくていいので、普通に接してくれるとありがたいです。

私はこの経験から三つのことが大切だと認識しました。一つ、障害を持つていることや、体が不自由な人だからなどの理由でからかったりしないこと。二つ、障害があるからといって特別扱いしないこと。三つ、みんなと同じように接すること。の三つです。当たり前だと思うものもあると思います。でもこれをしてくれるととても嬉しく感じると思います。特別扱いをするとかされる側が申し訳なさを感じたり、気を遣ったりしてお互いに疲れると思います。右手が人より小さいというのはあまり生活に支障がないけど、人と違うということはそれだけで支障がでたりします。なのでふつうに接してくれると嬉しく感じます。それから障害者だからといって距離をおいたり、この人は別というように分けるのではなくて、一人の人として接するのがいいと思います。

## 繋がり

福山市立加茂中学校 三年

田 中 陽 生

これは僕が小学校低学年の頃だ。家に帰っている時、近所に住んでいるおじちゃんが、「おかえり。」と声をかけてくれた。僕は、「こんにちは。」とあいさつをした。そして、立ち止まって、おじちゃんといろいろと話をした。恐怖心のない僕は、「おやつ食べる？」というおじちゃんの言葉に、ただ食べたい、嬉しいという気持ちでおやつをもらった。後日、おじちゃんとま

た会った。その時も、おやつをくれた。その繰り返しで僕とおじちゃんは仲良くなった。

それから、おじちゃんとは毎日のように会うようになった。その度に、おやつやみかんをもらったり、暑い夏には家に入らせてもらったりしていた。僕はいつも、次いつ会えるかなと楽しみにしていた。僕とおじちゃんはいつしかそんな関係になつていった。

その頃、こんなこともあった。

僕の母は育休中で、いつも家にいた。でも母が出勤している時に帰ってきた僕は、鍵も持っていないで、不安で泣いてしまった。そこに通りかかったおじちゃんに事情を話すと家で待たせてもらうことになった。別の日には、おじちゃんの家を助けを求めに行ったこともあった。とても迷惑をかけたけど、優しいおじちゃんだった。

こんなこともさせてもらった。

おじちゃんは畑もしていて、僕や妹、弟、父は、野菜の収穫をさせてもらい、その野菜をもらっていた。僕にとってそれは初めてとても良い経験になった。また、玄関に野菜を置いてくれていたこともあった。おじちゃんには感謝しかなかった。僕にとって大切な存在だ。

こんなこともあって、おじちゃんとは、六年の付き合いになった。

しかし、こんなおじちゃんから、僕が小学校を卒業するタイミングで引越しをするという話を聞いた。こんなに優しくして仲良くなったおじちゃんと六年間というあっという間の短い期間でお別れになることがものすごく寂しかった。最後まで楽しもう、思い出をつくらう、と必死になっていた。引越しの前には、手紙と花を持って、家族でお別れをした。引越しの前

そして、おじちゃんが引越した。その時から会えないとい

う現実には、いつも寂しい、また会いたいという気持ちでいっぱいだった。その時僕は改めて思った。おじちゃんは僕にとって本当に大切でかけがえのない存在だと。

この経験から、人と人との繋がりをいうものは本当に大切だということに気付かされた。人とはいつか会えなくなる日が来る。だからその人との出会いを一瞬たりとも無駄にしてはいけない。相手との時間を大切にしようすれば後悔しない出会いになる。そしてその出会いが自分にとって、大切な思い出と経験になる。またそれが、自分の考え方を考える大きな出会いになるかもしれない。

僕とおじちゃんのように、血の繋がりのない地域の人とのこれまでの関係は珍しいことなのか。あまりないことなのか。そんなの何の関係もない。言い方は悪いが、出会う相手は誰でもよい。しかし、その人との出会いをどれだけ大切にできるか、そして尊重できるか。それが他人との出会いの中で必要なこと。いじめや差別で苦しめられている人がいる現在の社会。それは他人を大切にしていないから。いじめや差別で相手はどれだけ苦しめられるのか。自分がされたらどうなのか。考えてほしい。生まれた瞬間からもう人権を、自分のものも相手のものも大切にしてほしい。そうしていきたい。

僕たちは、他人と、出会い、関わり、尊重し、大切にしていきたい。そして、信頼できる人間関係を築く。これは難しいことかもしれない。しかし、そんな関係だからこそ、幸せは訪れるのではないか。そんな関係で、国境を越えた幸せを作り上げる。それが、未来をつくるためのとても重要な「一歩」になるのではないか。



## 私の宣誓

福山市立駅家中学校 二年

江草 杏奈

「あ、あのんだ。」

私の住む地域には、女装をした男性がいます。今日も学校から帰っているとその人がいました。友達は「え、あの人は少し変だな」と思いました。おばあちゃんがそのことを家に帰ってから伝えると、おばあちゃんが若かったころからその男性は女装をしていたらしく、そのような人などのことをトランスジェンダーというそうです。トランスジェンダーとは、自分が生まれ持った性別と心の性別が違う人のことだと知り、そういう人は生きにくいんじゃないかなと思えました。トランスジェンダーのことを知り、私は性別が区別されている部分が日常生活の中でたくさんあることに気づきました。

例えば、学校で家庭科の授業を受けている時、一人の男子が「家庭科の授業なんか女子だけ受けとけばいいじゃん。」と言っていたことや、トイレの標識の色が女性は赤色、男性は青色に分けられていること、学校の制服で男性がスカートをはくのは変だと思われることなどです。また、私自身も家事が出来なくて料理をするのが好きじゃないから、女子らしくないなど思っていることがあります。それも性別の偏見になってしまっているなと思えました。

このような女子らしくない、男子らしくない、といった性別への差別や偏見のことをジェンダーバイアスというそうです。この、ジェンダーバイアスをどうすればなくすことが出来るん

だろうと思いい調べてみました。

ジェンダーバイアスをなくすために自分達にできることは、一人一人の思い込み、無意識な性別への差別に気づくことや、例え自分が理解できないことだとしても、「そういう人もいる。」と認めることだそうです。このような事なら、私も日常生活の中で意識することができるとし、一人一人がこのように意識を変えていけばもっと多様性が理解され、みんなが生きやすい社会になりそうだと思います。また、ジェンダー平等には世界各国の人が取り組みを行っていることも知りました。例えば、海外ではジェンダーフリー教育という、「男性だから」「女性だから」という固定概念をなくす教育を行っていたり、クォーター制という企業の役員などの一定の割合を女性にするという制度があったりすることです。日本では個々の企業での取組を行っている、女性が活躍しやすい環境を整えることを意識し、事務職などでは女性が育児に時間を使えるような時短制度などがあります。

私は海外のジェンダーフリー教育がとても良い取組だと思います。なぜなら、固定概念にとらわれず、自由にありのままの自分で生きられる人が増えると思ったからです。

私はこれまで、性別について悩むことなく生活してきたので、ジェンダーや性別への偏見や差別などには無縁だと思っていましたが、その男性をきっかけにトランスジェンダーを身近に感じ、自分にも無意識に性別の偏見があったんだという事に気づくことができました。今後、もっと性別への固定概念がなくなったり、人それぞれの考えや個性を尊重できる社会になったりしていけば、性別で悩む人も性別だけでなくありのままの自分を出せず困っている人も、みんなが生きやすい社会になると思いました。

だから私は、今日から男性、女性として接するのではなく、

一人の人として接することをここに宣誓します。

## 「違い＝個性」を大切に

福山市立誠之中学校 二年

占部愛音

私が目指す社会は、自分とは違う他人を受け入れ、誰もが幸せに生きていける社会です。

先日、私は道徳の授業で、「いじめ」について考えました。最初の質問は、「いじめはなくなると思えますか？」でした。私は質問に対し、「なくなつてほしい」と答えました。「なくなる」と答えられなかったのは、いじめに関する報道をよく見かけるからです。今も昔も、形は変わっているものの、いじめや差別は決してなくなつていません。

私の周囲でもいくつか思いあたることがあります。例えば、国際結婚の両親の元に生まれた女の子がいました。その子は顔立ちが他の子たちと少し違っていました。そのことを周囲からしつこくからかわれていました。また、同じ日本でも他県から転校してきた子が、ある日「言葉のアクセントがみんなと違う」と言われてしまいました。それ以来、その子が話をするたびに周りから笑われるようになりました。姉弟の影響で少女漫画が好きになり、自分でも描くようになった男の子がからかわれるようになったこともありました。その子は、学校の休み時間に描いていた漫画を取り上げられて破かれたり、落書きをされたら、黒板に貼られたりしていました。



このようなことは、どうして起こるのでしようか。私は自分に考えてみました。どの出来事も、「自分とは違う」ことを受け入れられない心、差別や偏見の心から生まれているのではないのでしょうか。もし、自分が生まれた場所とは違うところへ転校することになったら：見た目や文化が違うところへ行くことになったら：。からかわれるより受け入れてもらった方が安心できると、その人たちは気づけないのでしょうか。

私自身、「アクセントが違う」ことに悩んだことがあります。私は大阪から広島へ引越してきました。同じ言葉でもアクセントが違います。例えば、「おはよう」という言葉は大阪だと「おはよう」の「よう」が上がり、強調されます。私はそれが気になり、なかなか話しかけられずにいました。ある日、勇気を出して思い切って「おはよう」と大阪のアクセントでクラスメイトに挨拶をしてみました。すると、相手が笑顔で「おはよう」と返してくれたのです。私はその時、本当に嬉しく思いました。

コミュニケーションの壁になるのは、言葉だけではありません。価値観の違いも壁になると思います。私の弟はぬいぐるみなどのかわいいものが大好きです。寝るときにはいつもお気に入りぬいぐるみを抱いて寝ます。家族はそんな弟のことを、「男の子だから、女の子だからと好きになるものを制限しなくてもいい。個性だと思うし、本人の自由だと思う。」と言って見守っています。私もそう思います。周囲の人たちも、みんながそう考えられるようになれば良いと思います。

見た目や価値観など、人が違いを持っているのは当たり前のことです。ですが、人は「自分と違う他人」に出会ったとき、戸惑ったり避けたりしてしまうことがあります。「いじめ」や「差別」「偏見」をなくすには、固定観念を捨てて多様な「個性」を認め、視野を広げることが大切だと私は考えます。「違い」を「個性」としてお互いが大切にしていけたらと思います。そうする

ためには、相手がどういう人なのか、どんな違いを持っているのかしつかり知った上で対応していく姿勢が必要です。私も自分の個性や価値観を理解して相手に伝えられるようにしていきたいです。様々な「違い」や「価値観」を乗り越え「自分らしく」いられる人が増えれば、誰もが幸せに生きていける社会になると思います。

## ハチドリ勇气をもって

福山市立誠之中学校 二年

村木咲友



私は、いじめの「傍観者」となってしまうことがある。それは今でも心の痛みとして残っている。小学三年生の頃、聴覚障がいを持った女の子が転校してきた。彼女は授業中、補助の先生が隣にいたり、声を出して話すときに言葉がうまく出なかったりして、クラスで浮いていた。それに好奇心を持った一部の生徒が、彼女をいじめるようになった。最初は少しからかう程度だった。しかし、誰もそれを止めようとしなかった。私もそうだった。今の状況をいけないと分かっていたながら見て見ぬふりをした。誰にも咎められることがなかったからか、からかいはどんどんエスカレートしていった。そしてある日、ついに彼女の補聴器が無理やり取り上げられるという事件が起きた。それが彼女にとってとどめになったの

か、それから学校に来なくなってしまう。この事件の加害者は先生と彼女の保護者から指導を受けた。見ていただけの私は何も咎められなかった。しかし、私は知っていた。自分がいじめを無視し続けたことで彼女の心に大きな傷をつけてしまったことを。少し声をかけるだけでも何か変わったのではないかと。毎日のようにそう考えては後悔した。咎められるべきは本当に補聴器をとった彼らだけでよいのか。知っていて無視をし続けた自分や周囲の人間も咎められるべきではないのか。私は今でも、止めなかった自分もいじめをした人たちと同じだと考えている。

なぜ、私はあの時止められなかったのだろうか。理由は二つある。一つは次の標的が自分になってしまわないかという恐怖心があったからだ。もう一つは、何もしていないのは自分だけではない、だから関わらなくても大丈夫だという逃げの心があったからだ。これは私だけでなく、ほとんどの傍観者が持っている感情だと思う。では、これを解決するにはどうすれば良かったのだろうか。

私は、「協力して行動を起こす勇氣」を持つことが必要だったと思う。そう考えるようになったのは、「小さなハチドリのおきな一滴」という本に出会ったからだ。この話は、森で起こった山火事の火をハチドリが消そうと頑張る話である。ハチドリのおきななくちばしでは多くの水を運べない。しかし、その姿を見た森の動物たちがハチドリに協力し、水を運んだことで森の火を消すことができた。これは、いじめと共通していると思う。加害者という大きな力にハチドリのような小さな力では立ち向かえない。しかし、小さな力でも協力し合って勇氣をもって立ち向かえば、大きな力に勝つことができるはずだ。加害者に対して直接声をあげることが難しくても、最初の勇氣があれば、先生に相談したり被害者に「味方だよ」と伝えて寄り添ったり

することができるとは思わない。被害者を決してひとりぼっちにしてはいけない。助けるためにみんなが一度踏み出すことがいじめをなくすために必要だと思う。

もしかすると今後も誰かがいじめられている場面に遭遇するかもしれない。その時には、ハチドリのように勇氣をもって一歩踏み出したい。同じように勇氣をもって踏み出してくれる仲間がいると信じて。自分の勇氣が誰かの幸せに生きる権利を守ると信じ、勇氣をもって立ち向かっていきたい。

## 自分にしか見えないこと

福山市立誠之中学校 二年

仲 矢 愛 珠

つくづく思う。人間の心って難しい。それは成長を重ねるごとに強く実感してきている。

中学二年生に進級した春。私は『突発性難聴』になり、入院生活を送ることになった。原因はストレスだった。二週間の入院生活の中で、両親から何度も聞かれた。「何がストレスだったの？何かあったの？」その質問に対し、私は何も返せなかった。言いたくなかったわけでも、言えなかったわけでもない。私にも何がストレスだったのか分からなかったのだ。私は驚いた。耳が聞こえなくなるほどのストレスがあったはずなのに、なぜ自分に分からないのだろう。自分では自覚がなかったのに、なぜ耳が聴こえなくなってしまうのだろう。もしかすると、こ

これは私に限った話ではないかもしれない。今の社会に生きる全ての人は自覚のないまま疲れ、心や体の不調が起こっているのではないだろうか。

入院中、私はストレスについて調べてみた。すると関連情報として「精神病」というものが出てきた。詳しく調べてみると、精神病は近年増加傾向にあるのだという。中でも、鬱などの「気分障害」が特に増えているようだった。私は調べていくうちに、「気分障害で登校したり勤務したりできなくなった人への偏見がひどいことに気づき、驚愕した。「気分障害は甘えだ」「気分ならどうにかなるのではないか」という意見を平気で発信している人が社会には多くいた。私はそれを見て、ストレスの本当の原因はこれなのではないかと感じた。辛いことがあっても「気分なんだから」と片付けられてしまう環境では、自分の気持ちを伝えることなどできない。辛い気持ちを無理やり押しつぶして登校したり働いたりするしかない。周囲の偏見こそがストレスの要因なのではないだろうか。これはとても怖いことだと思う。私は、誰もが辛い時に「辛い」と言える社会でなければ人権は守れないと思う。誰かが「辛さ」を発信した時に、みんなでも寄り添おうとする社会であるべきではないのだろうか。少なくとも私自身は、寄り添える人間でありたいと思う。

辛い時に「辛い」と言えない。これは考えてみれば不思議なことだ。別に誰からも「辛い」と言っただけでいいのに、でも、みんな辛いと言わなくて言われているわけではないの。でも、みんな辛いと聞かなくていいし、言えない。言えないのは、周囲からの「目」があるからではないだろうか。他人の目や偏見、圧などの「目」に見えないモノ」のせいで、みんな日々苦しんでいる。社会でも学校でも家庭でも。そして、見えないモノによって自分が傷ついていることにすら気づけなくなる。そんな毎日を生き抜くにはあまり

にもエネルギーが必要だ。私はそんな社会であってほしくないと思う。弱音を吐くことができない社会ではないかと思う。

「人権」はこの世に生きる全ての人が持つ大切な権利だ。この権利を守るためには、相手の立場に立って考える力が必要だと思う。そして、相手から大切にされるだけでなく、自分で自分を大切にできる人間にもならなければならないと思う。相手だけでなく、自分も大切にすること。自分の傷も相手の傷も見えて見ぬふりをせずに寄り添うこと。それを大切にしていきたいと思う。



## 平和な世界のために私にできること

福山市立城西中学校 一年

板井優奈

「皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だ」という考え方をどう思われますか？また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか？」これは今年の八月六日に行われた広島平和記念式典で、広島市の松井一実市長による平和宣言の初めの言葉です。この言葉を聞いてハッとしました。今、ロシアがウクライナへ侵攻して二年六ヶ月がたっています。今、ロシアと日本が近いの



で日本もミサイルや爆弾を準備しておかなくていいのかなあと  
思っていたからです。

原爆投下から今年で七十九年だそうです。原爆で犠牲になつた人を慰霊するために、今年には約五万人の人が広島平和記念式典に参加したとテレビの中継で見ました。人類が経験したことのない数千度の熱線と爆風、その年だけで広島では約十四万人が原爆で亡くなりました。原爆が落とされた広島市と長崎市。日本以外に原爆が落とされた国は世界のどこにもありません。原爆が落とされるその瞬間まで、そこには、今と変わらないような日常の日々があったはずで、そこには、今と変わらないような日常の日々があったはずで、それを、たった一発の原子爆弾が広島と長崎の町を一瞬で破壊しました。

私は昨年、初めて広島平和記念資料館に行きました。新型コロナウイルスの流行で小学校の時に社会見学で行くことができなかつたため、春休みを利用して行きました。資料館の中は外国の方も大勢いました。中には涙を流しながら展示物を見ている方もいました。資料館の中には当時の写真もあって全身大やけどをしている子供の写真もありました。原爆が落ちた日に着用していた衣服はボロボロで血でできたと思われるしみがありません。人が一瞬でこんなことになる原子爆弾は、自分が想像してきたものをはるかにこえる、恐ろしいものだということを感じました。広島平和記念資料館は、広島市民をはじめとして平和を願う多くの人々によって創られ、原爆による犠牲者を慰霊し、平和を願って語り合う場となっております。原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」と刻まれています。広島市はこの文の意味を正確に伝えるため、日本語だけでなく、英語やフランス語、ドイツ語等、合計八か国の言語で説明板を設置しています。この碑文は、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて世界平和の実現を祈念す

るヒロシマの心が刻まれている文章なので、広島県民として、日本国民として、この言葉を忘れてはいけません。そして、この言葉を今こそ思い起こすべきなのではないでしょうか。

こうしている今も世界では戦争が続いています。ロシアによるウクライナ侵攻は今も終わっていません。イスラエルとパレスチナも何年も前から戦争をしています。皆が願っているだけでは戦争は終わらないし、平和も訪れません。国が違えば考え方や習慣、宗教も違うし、国や立場の違いを乗り越えることは難しいです。でも、子供を含む罪のない多くの人々の命や日常生活が今日もどこかで奪われています。日本にいと戦争は過去の出来事に感じるけど、生きたくても生きることができない人、大切な人を失ってしまう人が、今もこの世界にいて忘れている人、忘れてはいけません。

ある被爆者の語り部の方が、「なぜ私達は戦争・紛争を止めなければならぬのか？一緒に考えましょう。」と、外国の方へ語りかけていました。私も考えてみました。二度の原子爆弾が落ちた後、八月十五日に日本は戦争に負けました。でも、アメリカは本心に勝つたと言えるのでしょうか？この戦争に負けたのは日本かもしれないけれど、アメリカもたくさん兵士が死んでいるはずで、私は戦争に勝者はいないと思います。違う国に住んでいるだけで、同じ地球という世界に住んでいるのだから、お互いに傷つけ合い、自然も一緒に破壊しても何もいこうとはありません。世界は平和な場所であるべきです。核兵器のない世界へ、まずはお互いを知ることが大切なのではないかと考えます。国が違うと様々な考え方はあります。様々な考え方をお互いが理解し合うこと、違いをすぐに否定するのではなく、まずは受け入れ、自分の考えを見直すこと、皆で協力すること、中学生でもできることがあるはずで、広島に生まれたからこ

そ、平和学習で毎年原爆の事等を学びます。私の両親は県外出身なので、平和学習等はなかったそうです。この土地で育っているからこそより強く平和の尊さを感じるはずです。平和を維持することは難しいけれど、私にできることを探しながら、平和な世界をみんなでつくっていきたいです。



## 母への感謝

福山市立新市中央中学校 一年

妹 尾 咲 夢

「今度、転校生が二人来ることになりました。」突然、先生が言った。どんな子が来るんだろうとわくわくしていた。

先生の話では、二人は双子で、なんとベトナムから来るということを聞いた。

私は、どうやって話すのだろう、日本とベトナムの学校には、どんな違いがあるんだろうとベトナムについてどんどん興味を持った。わくわくしながら教室に来るのを待っていた。

ついに、対面の時が来た。私たちは、拍手で迎えた。初めに、日本語で自己紹介をしてくれた。この日から、二人の日本の学校生活が始まった。しかし、初めの頃は、おはようなどの日本語しかわからなくて、伝えるのにジェスチャーを使って伝えていたので、とても大変だったが、私は、この二人と仲良くなり

たいという好奇心で二人に積極的に話しかけた。最初は、タブレットを使って通訳をして話をしたり、日本語を教えてあげたりした。そうしていくうちに、だんだんと通訳機を使わなくても会話ができるようになった。

私は、家が近かったので、毎週のように遊ぶようになり、自分のことについて話をして、どんどん仲良くなった。私は、二人に勉強や日本について教えてあげたことで信頼を築くことができた。困ったら私に助けを求めてきてくれるようになった。二人から頼ってもらえていると思うと、とても嬉しかった。

私が二人を「すごい！」と思ったことがある。それは、二人とも児童会に立候補したことだ。まだ日本語を少ししか話せない時に、自分たちからやりたいと立候補し、児童会の仕事を頑張っていた。私も児童会に立候補していたので一緒に、あいさつ運動に行ったり、わからないことを教えてあげたりした。言葉が分からない中、自分たちのできることを増やしていった二人をとっても尊敬する。私が、「なぜ児童会をやるうと思ったの？」と聞くと、「日本語をもっとしゃべれるようになっていくな人と話してみたいし、学校をよりよくしたいから。」という答えが返ってきた。前向きな言葉を聞いて、自分も頑張らないと背中を押してくれた言葉だった。

先日、韓国の生徒を私の家に受け入れた。もし、ベトナムから来た二人と出会っていなかったら、生まれ育った国が違う人と関わったり、コミュニケーションをとったりすることに抵抗を感じていただろう。でも私は、ベトナムから来た二人と一緒に過ごした経験があったおかげで、何の抵抗も感じることなく、全く言葉を知らない国の人とすぐに仲良くなれた。

初めは、日本について教えてあげたいと思って関わっていた友達だったけど、私は、その友達のおかげで、通訳機さえあれ

ば、世界中の誰とでも友達になれる力を身につけることができ  
た。二人のベトナム人との出会いに感謝しないといけないんだ  
と気付かされた。私は、この経験を通して、言葉がわからなく  
ても心で通じ合うことができることが分かり、とてもいい経験  
をさせてもらっている。

これらのことは、生まれ育った国が違っても気持ちさえつな  
がれば、理解し合えるということだ。言葉が分かっても分  
からなくても、誰かが困っていたら、一緒に考えてあげたり、  
行動してあげたり、必要があれば、力を貸してあげたりするこ  
とは、とても大切なことだと思う。

私は、違う国の人たちとの二つの出会いを通して、実際に自  
分が経験することで、人を大切にするのを改めて学ぶことが  
できた。この経験があったからこそ、私は、一生忘れること  
のない韓国の生徒との大切な思い出を一ページ刻むことができた。  
そして、ベトナムの二人は、今でも勉強を教えたり、部活動を  
一緒に頑張ったり、同じクラスで頑張っている大切な友達だ。

### 無意識に閉じ込めていませんか？

府中市立第一中学校 一年

石井 葵

私は人権についての作文を書くにあたって、人権についてあ  
まり考えたことがないことに気づきました。そこで、人権につ  
いてまず調べてみることにしました。辞書には、「人権とは、人

が生まれながらにもっている、人間らしく生きる権利」という  
ように書かれていました。

日本国憲法第十一条で、「国民は、すべての基本的人権の享有  
を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵  
すことのできない永久の権利として、現在および将来の国民に  
与えられる」とされています。また、第九十七条で、「この憲法  
が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由  
獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去の幾多の試  
練に堪え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永  
久の権利として信託されたものである。」とされています。人権  
は、憲法で保障されているのです。

具体的には、人権には、包括的基本権、消極的権利、積極的  
権利そして能動的権利があります。いろいろな人権があること  
に驚きました。

今までそんなに考えたことはなかったけど、人権というもの  
は生きていくうえでとても大切なものだなと思いました。人権  
には、いろいろなことが含まれているけど、私は男尊女卑につ  
いて詳しく知りたいたいと思いました。「男性のほうが女性に比べて  
尊重され優位な立場であること」これが男尊女卑です。男尊女  
卑によって女性が不利になってしまったり、嫌な思いをしたり  
することがあります。私は、「女性を閉じ込めるずるい言葉」と  
いう本を読みました。その本には、様々なシーンの「ずるい言  
葉」が書かれてありました。女性の自由を無意識にうばう具体  
的な言葉が次々と挙げられていました。私は、すごく嫌な気分  
になりました。特に印象に残っているのは、二つありました。  
一つ目は、「皿洗い、やっておいてあげたよ」というシーンで  
す。これを読んで、私は不思議に思いました。「なぜ、女性がす  
る前提なんだろう。女性がしないといけないことなのかな。」と

思いました。確かに、家事をするのは女性というイメージが強  
いけど、我が家ではお父さんも家事をしてくれているので必ず  
女性がするということはないと思います。この言葉は完全に女  
性を閉じ込めているなと思いました。無意識に、家事は女性が  
するものという「男尊女卑」の考えに基づく価値観が女性を生  
きづらくしていると感じます。共働き世帯で、男性は仕事、女  
性は仕事と家事では、女性が大変すぎると思います。

二つ目は、「女の子に淹れてもらったお茶はおいしい」という  
シーンです。これを読んだ私の頭の中は「？」でいっぱいにな  
りました。なんでそんな風に考えるのがよくわかりませんで  
した。お茶の味は変わらないはずです。私がこの言葉を言われ  
たら、嫌な気持ちになると思います。だから、この言葉を言う  
必要はないと思いました。おいしいとほめてはいるものの、女  
性を下にみているのは明らかです。そして、「お茶を淹れるのは、  
女性がするもの」という無意識の男性中心の価値観があるよう  
に思います。お茶を淹れるのを女性だけにさせることは、女性  
に対する差別です。生まれ持った権利である人権が平等でない  
ために、女性の権利が保障されていないことがあると気づきま  
した。

私は今生きていて男尊女卑について悩んだことはありません。  
自分の好きなようにやりたいことを選んで生きられることに感  
謝したいです。人それぞれ個性があったり、考え方が違うけど、  
それを尊重し合える社会になればいいなと思います。男性なら  
こうすべき、女性ならこうすべきなどといった決めつけにとら  
われないようにしたいです。

今後、社会人になり、結婚・出産などしていくうちに男尊女  
卑に苦しむことがあるかもしれませぬ。人権について考えるこ  
とで、閉じ込めから抜け出すための考え方を身につけておきた

い  
です。

## 妹から教えられたこと

府中市立第一中学校 一年

杉原百華



私には、二歳はなれた妹がいます。妹は、小学校の時に急に  
学校に行けなくなりました。そして病院で場面かんもく症と言  
われ自閉症スペクトラムという発達障害の一つと診断されまし  
た。

それから妹は母と半年間母子登校をしてなんとかまた学校へ  
行けるようになりました。それでも時々不安が強くなると学校  
に行くのを嫌がることもあります。

私から見た妹はどこにでもいる普通の妹です。雨の日が苦手  
だったり、初めての場所や初めてのことに強い不安を感じたり、  
自分の気持ちを言葉にするのが苦手だったりするけれど友達と  
遊ぶのが大好きです。

私は初めて母から妹のことを教えてもらった時、「障害」とい  
う言葉に胸がちくちくと少し痛みました。

母にそのことを言うと、

「私もその言葉はあまり好きじゃない。障害という言葉が悪い  
意味で受けとるのではなくて、あの子にとってその時、その  
時でできなくて困っていることがある状態のことだととらえた  
らいいんだよ。」と教えてもらいました。母のその言葉で少しだ

け気持ちちがホツとしました。そしてもう一つ、いろんな練習を  
してできなかったことができるようになり、妹にとつてできな  
くて困る状態がなくなればそれは障害ではなくなるんだよと話  
してくれました。

私から見た妹の困っている状態は一つの個性だと思います。  
人はだれでも得意なことあれば苦手なこともあります。もち  
ろん私にもあります。

それでも難しいなと思う時もあります。それは自分の妹のこ  
とをどうしたのと友達に聞かれた時にうまく説明できない時が  
あります。周りの友達がどれだけ発達障害のことを知っている  
のか、また発達障害についてどんなふうにとらえているのか分  
からないからです。

私にとつては大切な妹だから人に悪いようにとらえられたり、  
変な目で見られたりしてほしくないという思いがあるからです。  
今では発達障害という言葉は世の中でもあたりまえに認知さ  
れてきているけれど、自分の身近な人がならないと本当の意味  
で理解できている人はやっぱりまだそんなに多くはないと思  
います。私もそうでした。

多様性が認められる時代になってきたのでこれから先一人一  
人の良い個性も、困ってしまうマイナスな個性も、その人の大  
事な一部だと認めて尊重しあえる世の中になってほしいと思  
います。

そのために今の自分にはなにができるのだろうと考えました。  
それは、どんな人であっても偏見の目で見ず、相手に寄り添  
い理解しようと相手を受け入れることだと思います。

人にはみんな幸せになる権利があります。だれもが笑顔で過  
ごせる世の中について考えさせられ教えてくれた妹の存在にあ  
りがとうと思います。

## 託されたいのちのバトン

学校法人盈進学園盈進中学校 三年

山本花奈

「私たちのこと、そしてこの歴史を伝えてほしいんや。」この七  
月に九十歳になった中尾伸治さんが私にそうおっしゃった。

中尾さんのお顔も手も病気の後遺症で変形している。でも私  
は、彼のすべてが大好きだ。

中尾さんは岡山県の国立（ハンセン病）療養所・長島愛生園  
入所者自治会の会長さんだ。私は中尾さんから、ハンセン病に  
まつわるいわれのない差別の歴史と、その厳しい現実を生き抜  
いた人々の人生を未来に伝えていくバトンを託された。そして、  
そのバトンは今、私の心にずっしりと重くある。

ハンセン病はかつて「らい」と呼ばれ、蔑まれた。慢性の感  
染症で、手足や顔に障がいが見えることなどから、忌み嫌われ  
てきた歴史がある。現在の日本では克服され、かつてこの病だ  
った人は元患者や回復者と呼ばれる。

国は一九〇七年、ハンセン病患者を国辱として「らい予防法」  
を制定（一九九六年廃止）。地域からあぶり出し、愛生園などの  
人里離れた場所に強制的に隔離した。こうして国は差別を作り  
出し、作られた差別におびえた市民もまた、患者の排除に荷担  
した。県単位で患者の収容を競う「無らい県運動」も全国で展  
開され、強制収容は勢いを増した。二〇〇一年、終生絶対隔離  
法「らい予防法」は、憲法違反と断罪され、国は過ちを認め謝  
罪し、補償法もできた。

愛生園には、家族と別れた患者専用棧橋、持ち物も体も消毒

された収容所、逃走したり職員に逆らったりした入所者が閉じ込められた監禁室の跡などが今も残る。子孫を残すことは禁じられ、男性には断種を、女性には堕胎が強制された。私は、愛生園を歩きながら、悲しい歴史を胸に刻んでいる。

納骨堂もある。療養所は病院と同じ。なのに……。それが、原則として、死んでも家族の元や古里に帰られない終生絶対隔離政策の現実を証明する。「もういいかい、骨になってもまあだだよ」と、ある入所者が詠んだ。国策を告発する怒りが込められていると私は思う。

現在、愛生園の入所者は八十人。園内の納骨堂には約三千八百柱がおさめられるが、その人たちも、ここに眠るのかと思うと涙がこぼれる。でも、だからこそ今、入所者に会ってお話ができる時間を大切にしていこうと私は思う。

私には忘れられない中尾さんのお話がある。中尾さんは十四歳で愛生園に収容された。病気が治ると、農作業の繁忙期には、二人兄弟の兄を手伝いに郷里へ一時帰省をした。兄は病気が治ったことをよろこび、中尾さんを歓迎した。だがある日、兄が中尾さんに告げた。「もう帰ってきてくれるな」と。兄には結婚が控えていた。兄に守るべき家族ができ、中尾さんの存在を隠さなければならなかったのだ。中尾さんの心中を想像すると、辛かっただろうにと、私はたまらなく悲しくなった。

しかし、中尾さんはこう続けた。「それを言わなければならなかった兄は辛かっただろうなあ。私の存在をずっと隠し通す家族との生活は苦しかっただろうなあ」と。私は、家族を引き裂く差別の現実を突きつけられたと同時に、厳しい差別を生き抜いてきた中尾伸治さんという一人の人間の、自分から相手を思いやるその姿に、人間のすばらしさと、人としての本当のやさしさを学んだ。そして、私も中尾さんのように、無条件のやさしさと思いやりのある人になりたいと心から思った。

中尾さんは今も、自治会長として、愛生園を世界遺産登録するために仲間たちと精力的に活動している。愛生園をこれからもずっと、人権の大切さを学ぶ場所にしたいという中尾さんの熱い思いがそこにある。

私は先日、仲間と愛生園へ行き、中尾さんの九十歳の誕生日会を開いた。「生きていてよかったなあ」と言って、ケーキをほおぼる中尾さんの笑顔がとてもすてきだった。そのときに、中尾さんがこんな話をしてくださった。

「つい最近、旧優生保護法は憲法違反という判決が出たね。障がいのある人が断種や堕胎を強制され、子どもが来ようにされ、それが不当だと訴えた裁判やったな。旧優生保護法は、ハンセン病者にも適用されたから、私も断種されたんや。せやから、わたしたちにも子どもがいない。せやから、私たちの存在とその歴史を語り継ぐ人がいないんやね。私は、それがいちばんさびしいんや。せやから、頼むわね。私たちのこと、そしてこの歴史を伝えてほしいんや。」これが冒頭の場面。中尾さんの顔は少し険しかったが、その後、ぱつと笑顔になってこう続けた。「九十歳の誕生日は『卒寿』ともいうやろ。せやからな、これまでの人生を一旦卒業して、また一から人生始めるつもりで生きるんや。そしたら人生、また楽しいやろ！」

中尾さんの手を握った。温もりがゆっくり、ずっしりと伝わってきた。そして私は誓った。

「私が中尾さんのいのちを伝えます。私がハンセン病問題を未来に生かします。私がいじめも差別もない、そして、病気の人も障がいのある人も一緒に暮らす社会を作ります」。





## 障がい者等用駐車区画って飾りなの？

近畿大学附属広島中学校福山校 三年

古 森 理々香

初めに言っておきたいのだが、障がい者等用駐車区画は障がいのある方や高齢者、妊産婦、けがをした方など、歩行が困難な人が利用できる駐車スペースである。

私には車椅子生活をしてきた叔母がいた。私が小学校六年生のときから、中学校一年生まで叔母とは二年間一緒に生活していた。どこかに行く時は車椅子ごと乗車できる車で移動していた。叔母が車に乗り降りする時にはスロープを使っていた。しかし、あるお店に入ろうとした際に縁石がありスロープを降ろすことができず車から降りることができなかつた。私はこれにショックを受けた。

「ただそこにあるだけで使えない。障がい者等用駐車区画なのに車から降りることもできない駐車場は意味がない。」と悲しく思った。またある時は、そこにしか停められない人がいるのに、ルールが曖昧で本当に使いたい時に使えない。健常者が使っている。それはおかしいと思う、障がい者等用駐車区画について調べてみるとアメリカでは車椅子マークが描かれたナンバープレートもしくは、利用許可証のプラスチックを提出していない車両は、レッカー移動され、その費用と罰金を科せられる。また、利用許可証の不正利用にも罰則があり、かなり高額な罰金になる。その他、イギリスや韓国でも同様に罰金が科せられている。日本でも、このような制度を取り入れるべきだと思っ

た。

障がい者等用駐車区画は別名、思いやり駐車場という。思いやりとは、相手の立場になって考えたり、見えない相手の気持ちに寄り添い、困っている人にすぐに気がついたりする心だと思ふ。その思いやり駐車場に健常者がそこに停めなかったからといって感謝されるわけではないが、その駐車場に停めないことよって助かる人がいるということを忘れないでほしい。小さな思いやりでもたくさん集まればとても大きな思いやりになり、優しく、温かい世の中になると思う。

叔母が車椅子生活になる前は、行きたいところには車にさつと乗り、駐車場にさつと停め、さつと下車して買い物をしていった。叔母が車椅子生活になってからは、買い物に行く時は介助者が車椅子に叔母を乗せ、車椅子が通れる道幅を確保し、車椅子専用車に乗り、障がい者等用駐車区画に車を停め、スロープをおろして下車。通路が広いところでのみ買い物可能な状況だ。車椅子に乗っていない時と比較したら、随分と時間がかかる。こういう方達にも気軽に買い物に行けるように車から降りることのできない障がい者等用駐車区画は造らないでほしい。

雨の日にも私たちは普通に傘をさして学校にも買い物にも出かける。車椅子生活をしている叔母は障がい者等用駐車区画からお店の扉に向かわなければならぬ。しかし、障がい者等用駐車区画からお店に入るまでに屋根がない。介助者が傘をさしても車から車椅子を降ろすことも、移動させることもできない。なので、雨の日に出かけることが難しいのが現状だった。病院には中に入るまでに屋根がある。私は叔母とよく図書館や美術館に行っていた。これらには屋根が設置されていなかった。公共施設である図書館や美術館なども屋根を設置するべきだと思ふ。

世界人権宣言第一条に「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。」とある。私は、「病院に行く以外にも障がいがあっても楽しむことは生きることには必要だ。」と思う。

まずは、私ができることは何かと考えてみた。「困っている人に声を掛け、行動する。」また、自分自身に余裕がないと相手を考えてやるのが出来なくなることもあるため「自分の心にも耳を傾けて生活する。」ことを意識していく。

勇気を出して社会に訴えかけて行くことをしていきたい。私の声が届く社会にできるようにしていきたい。

夏になると、地面が熱く感じる。車椅子の叔母は私より地面に近く、暑かっただろうな。

## 「人権」でつながる私たち

近畿大学附属広島中学校福山校 三年

佐藤 心菜

初めて「人権」という言葉を知ったのは、小学生の時でした。学校の授業で部落差別や同和問題について学びました。小学生だった私が思ったことは「この授業をしなかったら、部落差別や同和問題を知ることがないから、そもそも差別なんてしないのに」でした。でも、これは間違った考えでした。

私は肌の色が黒いです。いわゆる地黒です。日焼けをするともっと黒くなります。小学生の頃は何も言われなかったのに、

中学生になってからは、男子から肌が黒いことを馬鹿にされるようになりました。「なすび」というあだ名をつけられました。私はそう言われるのがすごく嫌で「やめて」と伝えました。でも肌が黒いことをからかう言動は続きました。自分の肌の色が嫌いになり、とにかく一年中日焼け止めを塗り、日焼けしないように夏でも長袖を着たり、外に長時間出していないようにしたりと、ずっと気を遣っていました。母に「何でこんな色の肌で生まれたの？」と聞いた時に、逆に母から「何でそんなことを聞くのか」と言われ、事情を説明したら、ものすごく怒っていました。「肌の色のことで人を馬鹿にしたり傷つけるなんて絶対に許されないことよ」と。思っていた以上に母が怒るので、私が悪いことをしたような気分になり、こんなこと言うんじゃないかと少し後悔したくらいです。

以前から人種差別という言葉は知っていましたが、どこか他人事でした。そこで人種差別について調べてみました。人種といても肌の色だけではなく、骨格や毛髪などの身体的特徴や、言語や宗教や文化など民族としての差別もありました。肌の色の濃さでの差別もあります。カラリズムといって、同じ人種民族の間で肌の色がより明るい人が、より暗い人よりも優位に扱われるというものです。なので、アジア人同士はもちろん、白人同士、黒人同士でも起こってしまう差別です。アフリカやアジアでは奴隷制度や植民地支配により、白人に近い白い肌が良いいという歴史的な背景があります。ではここ日本で私の肌が黒いと馬鹿にされるのはなぜなんだろう。周りをよく見てみれば気づくことがいろいろありました。ドラッグストアには「美白」と書かれた商品が数多く並んでいます。スマホの写真加工アプリやプリクラでは「美肌」にすると肌の色は必ず明るくなります。無意識のうち私たちに私たちの間に「肌の色が明るい＝美しい」という考えを植え付けられているのかもしれないと思



ました。私自身もそう思っていたから、自分の肌の色をコンプレックスに感じていたんだと思います。そして肌の色が明るいうちに対しても「色白でいいね」と自分でも気づかないうちに肌の色に優劣をつけていた事にも気づかされました。

しかし、最近では、どんな人種でも、どんな肌の色でも、美しいという価値観が広がりつつあります。「ホワイトニング」や「美白」といった言葉を商品や広告に使わないと決めた化粧品メーカーもあります。ファッション業界やメディアでも肌の色に基づいた「美」についての価値観も多様化してきました。

私は差別を知らなければ、差別は生まれません。差別意識がないかと思いましたが、それは違っていました。差別的な意識がなくとも、自分でも気づかない間に、人を傷つけ差別していることがあるということ。そして逆に自分が差別されている事にもちゃんと気づき、声をあげなければいけないと思いました。そのためにはまず差別や人権について学ばなければなりません。

「無知は罪」という言葉がありますが、「知らなかった」ではないかと思えます。知ろうとしないことも同じです。人権を知る・学ぶ機会そのものが人権の一つです。

私は自分の肌の色が嫌いではなくなりました。そして今の私なら、肌の色を馬鹿にされるのが、私の人権が脅かされると気づけます。彼らにも今一度、自分の発言や行動が誰かを傷つけ差別していないか、考えてほしいと伝えることもできます。そしてなぜ彼らが私にそんなことを言うのかも知りたいです。「尊重」とは価値のあるもの、尊いものとして大切に扱うこととありました。お互いの人権を尊重するためには、お互いを知り、受け入れ、違いや個性を認め合うことが必要なので、まずは家族や友達、クラスメイトや地域の人たちと私から積極的にコミュニケーションをとっていききたいと思いました。

## 令和六年度 中学生人権作文集

印刷 令和七年一月

発行 令和七年一月

発行者

福山市三吉町一―七―二

広島法務局福山支局

福山人権擁護委員協議会

広島県福山市新涯町

一丁目十一―三

印刷者

(有)福山ポップセンター

◎ 本作文集を転載又は教材等に使用したい場合は左記にご連絡ください

広島法務局福山支局

電話

〇八四・九二三・〇一〇〇

FAX

〇八四・九二三・八八九二

## 中学生の皆さんへ

学校生活・日常生活の中で  
困っていること、悩んでいることがあれば、  
学校から配られている

「子どもの人権SOSミニレター」  
に書いて送ってください。

人権擁護委員が相談をお受けします。

秘密は守りますので、安心してください。

悩みごと・心配ごとのある方、  
困っていることがあるのに  
どこに相談すればよいのか分からない方、

平日の午前8時30分から午後5時15分まで、  
人権擁護委員又は法務局職員がお話を伺います。  
お電話ください。

**みんなの人権110番**

**0570-003-110**

# 人権相談・人権に関する情報はこちらで



人権イメージキャラクター  
人KENあゆみちゃん



人KENまもる君

子どもの人権110番	0120-007-110
女性の人権ホットライン	0570 - 070- 810
広島法務局福山支局	084-923-0100